

Analyzing of Consciousness about Teaching Profession of University Students in the Teacher Training Course

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松永, 幸子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/164

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



教職を目指す学生の教師についての意識

— 教師という仕事の魅力と児童生徒とのかかわり方、研修とプライベート、
今後の教師のあり方にかかわって —

Analyzing of Consciousness about Teaching Profession of
University Students in the Teacher Training Course

松 永 幸 子

MATSUNAGA, Sachiko

実際にこれから教師を目指す学生たち—教師の卵—はどのような意識を持っているのか？アンケートを基に分析し、今後の教師の有り方を探究し、また、教師に対する社会の意識改革の一助とすることが本研究の目的である。本学の幼稚園・小学校教員免許取得希望学生141名を対象にアンケート調査を行った。その結果、明らかになったことを順次提示した。

学生の教職意識により、学生は、教師は厳しいだけではなく、基本的には優しい教師を求めていることが明らかになった。親身になって子どもの相談に乗るなど、距離の近い教師を理想の教師像としていた。また、さまざまな体験により広い視野を持つため、民間企業等での研修には非常に前向きな意識が見られた。このような若者の意識を、古い既存の価値観の中に押し込めるのではなく、時代とともに変化する教師像に対応するため、教師についての社会の意識をあらためる必要性があることが提案できる。

はじめに

日本では、一般的に、教師という職業は、僧侶や牧師といった宗教者とならんで「聖職」の一つと考えられ、専門職として認められる一方で、規範を乱す行為などについて他の職業以上に社会から厳しい目を向けられる対象となってきた。そのような職業に対し、実際にこれから教師を目指す学生たち(教師の卵)はどのような意識を持っているのか？アンケートを基に分析し、今後の教師の有り方を探究し、また、教師に対する社会の意識の改

革の一助とすることが本研究の目的である。今回、本学の幼稚園・小学校教員免許取得希望の2年生141名を対象にアンケート調査を行った。その結果、明らかになったことを順次提示していきたい。¹⁾

アンケートのうち、以下の項目について取り上げる。

1. 教師を目指す理由
2. 理想の教師像
3. 尊敬する教師
4. 教師は休日もプライベートより仕事を優

キーワード：教職、教師、教職を目指す学生、体罰、研修、プライベート

Key words : teaching profession, teacher, students in the teacher training course, physical punishment, on job training, private life

先すべきか？

5. 体罰について
6. 厳しい教師と優しい教師では、どちらが良い教師だと思うか？
7. 教師という仕事の魅力
8. 教師は民間企業で研修を受けるなど、教師以外の世界も知った方が良いと思うか？

第1章 教師を目指す理由と尊敬する教師

1. なぜ教師を目指すのか

なぜ教師を目指すのか、について、以下に回答を抜粋したい。

- ・子どもが好きで、子どもの成長に関わることが出来る。
- ・子どもたちと関わり、互いに学び合って行きたい。
- ・人に教えたりすることで、その子がわかったときに、嬉しそうな顔をするのを見ると、自分まで幸せな気分になる。
- ・子どもに、少しでも楽しい場を提供し、不登校の子どもを減らしたい。
- ・子どもが好きで、子どもと関わりたいため。
- ・教えることが好きだから。
- ・小学校時代の先生が、苦手なものなどを強制するのではなく、子どもが自らできるように支援したことが印象深かったため。
- ・大変だがやりがいのある仕事だと思うため。
- ・今まで好感の持てる教員に出会わなかったため。
- ・小学校の頃の先生を尊敬しているため。
- ・子どもが好きで、収入が安定しているため。
- ・これからの日本を支えてくれる人を育てることが出来る。
- ・幼稚園の時の先生に憧れていた。

- ・子どもたちに遊ぶことや人と関わる楽しさを教えたい。
- ・インターンシップなどにより、教えることの楽しさを知ったため。
- ・中学の時の先生に嫌悪感を抱き、人間として、その人の有り方に疑問が残り、教師になりたいと考えた。
- ・常に新しい発見があるから。
- ・自分が小学校のとき、不登校で、それから立ち直らせてくれた教師がおり、自分もそのようになりたいと思った。
- ・子どもの人格形成に関わることが出来る。
- ・幼児期の教育が重要で、その後の人生を左右することもあるため、そこを手助けしたい。
- ・食育に興味がある。
- ・いじめや不登校を減らす手助けをしたい。
- ・虐待から守るなどしたい。
- ・幼稚園の頃の先生が、時には優しく、時には厳しく接している姿を見て尊敬できたため。
- ・勉強が好きだから。
- ・人に新しい事、自分の体験を教える事が出来、子どもたちに夢を与えられる。
- ・子どもと関わりながら、自分自身も成長できる。
- ・虐待やいじめなどから子どもたちを救いたい。
- ・生徒が先生みたいな大人になりたいと思ってくれるから。
- ・子どもに勉強を教えるのが好き。
- ・幼稚園の時の先生が好きで、そのようになりたいと思った。
- ・自分の言葉や言動によって、子どもたちが変わっていく様子を感じることが出来るから。

以上の答えが大半を占めていた。この結果から、自分の経験を振り返り、尊敬できる教師に出会ったことが教師を目指す理由になっているケースが多いことが明らかになった。教師は人の成長に関わり、自分の経験を生かすことが出来ることや、子どもだけでなく、同僚や親など、多様な人との出会いも、教師としての魅力ととらえているようだ。収入などの安定性も教職を目指す一因となっている。

一方、自分が今までに出会った教師に尊敬できる人がおらず、そのため、敢えて教師を目指すことにした、という学生も若干だがあった。尊敬できない教師が反面教師となり、彼らに対する不信感や憎しみが、だから自分は良い教師になる、と奮起する要因となっている。

2. 尊敬する教師とは

1 で見たように、教職を目指す大きな要因になる、これまでに出会った教師たち。自分が今まで出会った中での尊敬する教師は、どのような教師だったのか。それについては、以下のような回答を得た。

- ・基本的に優しく、怒るときはしっかり怒る。
- ・親身になって相談に乗ってくれた。
- ・自分の意思をしっかり持っている。
- ・メリハリがあり、オン、オフがしっかりしている。
- ・子どものことを1番に考えてくれる。
- ・日本語を話せない自分のために、独学でスペイン語を勉強し、話しかけてくれた生徒思いの先生。
- ・苦手な教科をわかりやすく丁寧に教えてくれた先生。
- ・優しいが、時には厳しく注意してくれる先生。

生。

- ・自分が孤独にいるとき、「うちのクラスにおいて」と話しかけてくれた先生。
- ・1人ひとりとしっかりと向き合う先生。
- ・茶道や読み聞かせなど、さまざまな体験をさせてくれた先生。
- ・話していて楽しい先生
- ・生徒の気持ちになってくれる
- ・雑談を交えて授業をしてくれる先生。
- ・厳しいけど熱い先生
- ・部活動を熱心に指導してくれた。
- ・最良をせず、生徒に平等に接する先生。
- ・生徒の好きなアニメキャラクターやアーティストを把握していて、生徒の元気がない日にその話をして元気づけようとする先生。
- ・厳しいが優しくユーモアがある。
- ・生徒との距離が適切で、保護者からも信頼されていた。
- ・子どもたちと一緒に存分に楽しんでもくれる先生。

以上が主な回答である。この結果から、尊敬できる教師というのは、「子どもの目線で、子どものことを真剣に考え、親身になって相談に乗ってくれる。生徒に平等で、時には厳しいが愛情のある教師」というふうに総括できる。回答で特に目についたのが「メリハリ」「親身になって相談に乗る」「信頼」「厳しい」という言葉だ。特に「メリハリ」については、かなりの学生が使用していた。授業時は真剣に、雑談するときには楽しくゆるく話をする。本題に戻るときには戻る。優しくすべきときにはするが、叱るべきときには厳しく叱る。このような教師に出会い、学生たちは今、そのあり方を尊敬している、ということになる。

しかし、今までに尊敬できる教師はいなかった、と答えた学生も4名いた。前述したように、尊敬できる教師がいなかったからこそ、自分は慕われる教師になろう、と決意した部類の学生たちである。

3. 理想の教師像

では、自分が思い描く理想の教師とはどのような教師なのか？理想の教師像について聞いた。以下のような回答を得た。

- ・時には優しく、時には厳しい教師。
- ・相談しやすく保護者からも信頼される。
- ・卒業してから思い出してもらえる教師。
- ・子どもの意見を尊重し、子どもの気持ちになって考える教師。
- ・臆畏をせず、平等に接する教師。
- ・明るく楽しい教師。
- ・多様な経験をさせてあげる力量のある教師。
- ・子どもたちの個性を大切にできる。
- ・様々な分野の知識が豊富である。
- ・辛くとも逃げずに乗り越えられる教師。
- ・毎日笑顔で行動できて、親ともコミュニケーションをとれる。
- ・授業以外のことも教えられる人。
- ・教師や学校としての建前なしに生徒や保護者を第一として対応してくれる教師。
- ・保護者や地域、周りの教師と連携を、より良い学校作りを目指していける教師
- ・子どもたちと一緒に成長していける教師。
- ・生徒の自主性を尊重し、伸ばすことが出来る。
- ・子どもと真剣に向き合う教師。
- ・友達のような先生。
- ・壁を作らず接する先生。
- ・学び続ける教師。
- ・学ぶ意欲を引き出せる教師。
- ・メリハリのある教師。
- ・勉強もスポーツも指導できる。
- ・優しいが厳しいときもあり、そこに愛がある教師。
- ・子どもたちをわくわくさせる教師。
- ・第二の母親的存在。
- ・子どもが新しい発見をすることの出来る教師。
- ・自然と勉強できる環境をつくる事が出来る教師。
- ・人として尊敬できる教師。
- ・子どもの気持ちを理解した上で、正しい道へ導いてくれる教師。
- ・完璧ではなくてもいいので、子どもたちから好かれ周囲から信頼される教師。

理想の教師については、上述のように多様な回答が得られた。やはり子どもを平等に扱い、親身になって相談に乗る。子ども一人ひとりと真剣に向き合う。メリハリがある。笑顔でコミュニケーションが取れる。学び続ける。人間として尊敬できるなどが主である。

これは、自分が出会った尊敬できる教師、と共通している点が多い。学生たちは、これまで出会った教師の中に「理想の教師」像を重ねている。これは、大学生としての今、教職の専門知識を学んだ上で振り返り、「尊敬できる」と認めている教師であり、その当時の印象というより、現時点で理想の教師像を描いたうえで過去を顧みたとき、今となっては、あの先生が良い先生だったのだ、と評価している可能性が高いと言える。

第2章 今後の教師はどうあるべきか

1. 教師とプライベート（私生活）について

教職を目指す学生は、教師とプライベート（私生活）の関係について、どのように考えているのか、調査してみた。少し前、自分の勤務校の入学式より自分の子どもの入学式を優先させ、勤務校を欠席した教師についてマスコミで取り上げられ、さまざまな議論を呼んだ事は記憶に新しい。

質問は以下である。

「教師は、休日も仕事よりプライベートを優先させてはいけなと思いますか？」

教師は、休日にも仕事を優先させるべきなのか？という問いに対して、大半の答えは、「NO」であった。

- ・よほどのことでなければプライベートを優先すべき。
- ・プライベートもあり、人間的魅力が増すのでプライベートを重視すべき。
- ・休日は休日なのでしっかり休むべき。
- ・精神的に疲れるので、休みはプライベートを優先すべき。
- ・教師も人間であるので、プライベートを優先すべき。
- ・休日も仕事を優先しろという考え方が当然になっているから教師がストレスを感じる。
- ・優先すべきではない。プライベートはプライベートで楽しみ、仕事は仕事ですというメリハリをつけるべき。
- ・教師も自分の子どもの運動会などは行ってあげるべきだ。
- ・場合による。
- ・教師も休日は家族や自分の時間を大切にすべきだ。

- ・教師もリフレッシュが必要。
- ・教師にも家族があり、子どもの行事などには参加するべきで、そのために、他の教師との連携が必要
- ・生活の全部を「教師」として生活する必要はない。
- ・家族を大切にするのも、一つの仕事である。
- ・自分の時間もないと精神的に疲れる。

結局、教師は休日も仕事を優先すべき、としたのは、141名中11名であった。1割にも満たないことになる。教師も人間だから私生活も充実させるべきだ。いつも教師でいる必要はない。教師は家族も大事にするべき。といった回答が目立つ。

これらの事は、一昔前から根強くある「教師は何よりも受け持ちの生徒のことを一番に考えるべきで、サラリーマン精神ではない」というような風潮とは全く相いれない意識である。たしかに近年、教師のストレスが強く、鬱病や自殺者が増加している。新採教師の自殺やうつ病も相次ぐ。そこには、帰宅後も休日も深夜まで授業準備。私生活を楽しむ余裕のない教師生活が浮かび上がる。²⁾ また、海外と比べ、日本の教師は仕事量が多く勤務時間が長い。³⁾ 現代の若い学生の意識をくみ取り、昔からの社会における教師聖職論意識を変えていかなければならないのではないか、と考えさせられる結果であった。

2. 教師の研修について

今まで、理想の教師や尊敬できる教師についてなど、教職の仕事を中心に見てきた。一方、教師が民間企業などで研修を受け、見識を広げること、彼らはどんな意識を持っているのだろうか。質問は、

「教師が民間企業で研修を受けるなど、教師以外の世界も知った方が良いと思うか？」

ここでは肯定意見が9割以上を占め、以下のような回答を得た。

- ・絶対に知った方が良い。他の世界を知らない教師が多様な子どもを教えるのは難しく、結果、日本人の考えが狭くなるし、将来的に、世界を知った教師が必要。
- ・生徒に職業の話などするときに役に立つ。
- ・様々な経験をするにより、生徒に多様な視点からアドバイスできるようになるため。
- ・大人同士の社会を知ることで、多様な職業に興味を持つ子どもを導くことが出来る。
- ・広い世界を知ることが必要。
- ・民間企業で研修を行うことで、保護者の職業を理解出来、支援方法や接し方がわかる。
- ・教師としての常識だけでなく、一般的な常識を見に付けることが出来る。
- ・教養を広げるために必要。
- ・教師が色々な事を知ることで、子どもたちの夢が広がり、新しいことに興味を持たせることが出来る。教師は子どもたちの「夢」を与える仕事である為、教師以外の事を知る、ということが良い。
- ・教員免許をとったから、この仕事だけをしていかなければいけないとストレスになるかもしれないため、他の仕事も知っていた方が良い。
- ・保護者の仕事の理解につながるため。
- ・人生は一度切りなので、知っておいた方がいい。
- ・民間企業からの教師を迎えることも良いのではないかと。（ただし高齢者は除く）
- ・高校のとき、会社員から教師になった人が

いて、面白い人だった。

- ・子どもの疑問に答えられることが多くなる。

教師は民間企業で研修する必要がない、という意見は7名と非常に少数だった。その理由は以下である。

- ・教師の専門性に必要ない。
- ・個人的にしたければ行くと良い。
- ・研修をすることで、民間に魅力を感じて、教師を辞める人が増えるのではないかと。

以上の結果から、教師も幅広く民間企業などで学び、多様な知識を身に付ける必要があると考えていることが明らかになった。その理由として、多様な知識がある方が、子どもたちに広い世界を教えてあげられること、人間としての魅力が増すこと、子どもの夢を広げてあげることが出来るということなどがあげられた。特に多かったのは、保護者との関係性や連携に役に立つというものだ。民間企業など、保護者たちが日常身を置いているような場所を知ること、保護者の立場や仕事を理解する一助となり、保護者との関係性が築くことが出来たり、コミュニケーションが取りやすくなるというものだった。

この結果から、学生たちは教師という仕事を目指しながらも、狭い視野で学校の世界しか知らないという教師を目指しているのではなく、多様な経験、見聞を通して知識を豊かにし、生徒たちにさまざまな情報を提供できる教師を目指しているということが言える。

3. 教師という仕事の魅力について

では、彼らが考える教職の魅力は何なのか？アンケートの結果、以下のような回答が

得られた。

- ・親以外の大人として、子どもからの信頼を寄せられること。
- ・子どもを守ることが出来る。
- ・親や他の教員など、たくさんの人と関わりあえる。
- ・子どもの成長を見守ることが出来る。
- ・人間として大切な時期に援助することが出来る。
- ・子どもたちに、多くのことを教えることが出来る。
- ・子どもの可能性を高め、心の育成が出来る。
- ・子どもたちと触れ合い、たくさんの思い出を作ることが出来る。
- ・子どもの人格に影響を与えることが出来る。
- ・多様な子どもと関わることにより、自分自身がいろいろな事を学ぶことが出来る。
- ・子どもの成長を家族の次に間近で見届けることが出来る。
- ・子どもが持っている無限の可能性を引き出すことが出来る。
- ・自分が学んできたことを伝えられること。
- ・生徒と絆や信頼関係が出来る。
- ・子どもと一緒に楽しみながら出来る仕事。
- ・教師の人間性が勝負になる点。
- ・自分の努力が子どもに伝わり、それが結果としてあらわれるところ。
- ・子どもたちの未来を一緒に考えることが出来ること。
- ・安定している。
- ・子どもが将来、夢をかなえ、幸福になるための支援をすることが出来る。
- ・子どもたちの笑顔を見ることが出来る。
- ・学校という場でしか学ぶことの出来ないことを教えることが出来る。

- ・子どもの未来を明るくするために貢献することが出来る。
- ・苦勞も含めて、常に新しい発見がある。

児童生徒やその保護者から信頼を得られること。子どもの成長に関わることが出来る、また、自分の力で、子どもが夢を叶える手助けをしたり、未来を切り開く援助をしたり、という内容が多い。自分とは違う人間の人格形成・人生に関わることが出来るという点が最も魅力的ということのようだ。

4. 体罰について肯定か否定か？

周知のように、学校教育法により教師による体罰は禁止されている。そのような中、教師を目指す学生は、実際にどのような体罰観を持っているのだろうか。

体罰については学校教育法で禁止されているが、教師を目指す学生が、どのような考えを持っているのか。敢えて問いかけてみた。ここでは、体罰否定派と肯定派に分け、理由を記述することとする。

否定派

- ・子どもを傷つける。
- ・暴力は暴力の連鎖を生む。
- ・子どもが自信をなくす。
- ・子どもと教師の信頼関係が崩れる。
- ・子どもを痛めつけることは人間として許されない。
- ・口頭で注意するなど他にも方法はある。
- ・体罰を受けた子どもは、自分が教師になったときに、また体罰をしてしまう。
- ・体罰のラインが曖昧であり、行き過ぎた体罰は問題になるため。
- ・恐怖心を植えつけるだけ。

- ・暴力を使用する教育は間違っている。
- ・体罰は大人の自己満足である。
- ・体罰を受けた子どもの心に、一生傷が残る。
- ・体罰で矯正しようというのは、安易で、教師が楽をしようとしている。
- ・教師も自分の感情をしっかりコントロールすべき。体罰以外のさまざまな方法で伝えることを試みるべきだ。
- ・体罰はする側のストレス解消のためにすることもあるため。
- ・体罰は受け止める側が、「愛の鞭」だと思っていなければ、立派な暴力になるため。
- ・生徒が不登校になる原因になるかもしれないため。
- ・体罰により生徒を死に至らしめることもある。
- ・体罰を受けた生徒は、親になった時、自分の子どもを虐待するかもしれないから。
- ・子どもの身体や心に傷が残るかもしれないため。
- ・体罰により教育効果は上がらないと思うため。
- ・体罰での指導は、単なる指導力の欠如。
- ・子どもが大人を信じられなくなる。
- ・体罰でいうことを聞いても、それはただ「従っている」だけで、更生しているわけではないから。
- ・自分は学生時代、運動部で体罰を受けてきたが、愛の鞭と思い、体罰も必要だと思っていた。しかし、近年、体罰で、生徒を死に至らしめるなど限度のわからない教師もいるため、体罰は禁止で良い。
- ・殴られることで、子どもが消極的になったり、コミュニケーションが取れないようになるかもしれないから。
- ・自分が以前、体罰を受けていたが、傷ついただけで、何も進歩しなかった。
- ・体罰をした方もされた方も心に傷が残る。

- ・何のために言葉があるのかを知るべき。
- ・体罰を受けることにより、教師や学校を嫌いになってしまうため。
- ・体罰は一時的な問題解決にはなるが、根本的な解決にはならないため。
- ・子どものトラウマになる。
- ・どちらも言えない。
- ・体罰がないとわかっているから生徒が教師のいうことを聞かない。教師をバカにするなど度が過ぎたときは、体罰はやっていいのではないか。

肯定派は13名であった。理由は以下である。

- ・効果的である。
- ・やはり罰は必要。
- ・部活動などでの体罰は、ある程度認められるべき。
- ・少しの事で、体罰だと捉えられ過ぎていく。
- ・使い道を間違えなければ必要な暴力はある。
- ・保護者に許可を得て、度合も考慮すれば良い。
- ・最終手段として、教師の自衛として使用すれば良い。
- ・殴るのは良くないが、立たせるなどは良い。
- ・言葉でわからない場合は仕方ない。
- ・モンスターペアレントの考えを変えるために、認めた方が良い。
- ・自分も体罰を受けたが、厳しいと感じたことはなかった。
- ・時と場合によるが、体罰をすべきときもある。
- ・教師と生徒が信頼関係があり、本当に正しい場合は、体罰をしても良い。
- ・今の子どもは罪に対する意識が低いので、警察をからかうなどする。やはり体罰が必

要。

大半の学生たちは体罰否定派であった。理由として、子どもの心に傷が残る、信頼関係が築けない、というメンタル面での悪影響があげられた。一方、法律で禁止されているにもかかわらず、根強い肯定派も約1割ほど存在した。やはり時と場合によっては必要なのではないか、という意見である。ここに教師を目指す彼らの葛藤が見られる。

5. 教師に何を求めるか？

優しい教師と厳しい教師では、どちらが良い教師だと思いますか？という曖昧な質問を提示した。それについて、以下の回答を得た。

「優しい教師」が良い、の理由として以下があげられた。

- ・何でも相談しやすい教師が良いから。
- ・褒めるところは、しっかりと褒め、子どもの事を自分の事のように喜ぶことが出来る教師。
- ・注意すべきところは注意すべきだが、厳しさと子どもの方に愛着がわかないのではないかな。
- ・自分自身が、いつも優しい教師を信頼していたため。
- ・厳しいだけでは何も生まれないため。
- ・優しいと子どもとの距離が近くなるため。優しいだけではなく、子どもの気持ちを理解することが重要。
- ・いつもうるさく怒られてばかりだと生徒たちの気持ちが沈むため。

「厳しい教師」が良いという理由としては以下があげられた。

- ・優し過ぎて、子どもたちとの深い信頼関係は築けない。
- ・厳しさの中に優しさがある教師。
- ・優しいと友達感覚になってしまうため。
- ・いつも優しいと、子どもが善悪の判断がつかなくなってしまうため。
- ・生徒が大人になってから感謝されるのは、厳しい教師だと思う。
- ・厳しさの中に優しさがあると良い。
- ・優しさだけでは信頼は築くことができない。

結局、優しい教師、という回答は45名。残りは厳しい教師、または両方を備えた教師、という回答だった。

全体としては、優しさと厳しさ、両方を兼ね備えていることが重要だ、とするものが半数を占めた。

しかしながら、半数近い学生が「優しい教師」と答えたことは、思春期を超えた大学生が過去を振り返ったとき、厳しかった先生に感謝の念を抱く傾向にあるのではないかと予想していた筆者にとって結末は意外であった。これは、現代学生のメンタルの有り方を如実にあらわしているといえるのではないかな。もちろん、回答では、「優しい教師」の中にも厳しさがあり、叱るべき時には叱る必要がある、という回答が多かった。

近年、親に叱られたことがないという若者が増えている。また、少子化により、かつてと違い、家庭内でも丁寧な扱われ、学校内でも教師との距離が近いという状況に慣れてきた学生が多い。新人教師が短期で退職したり、自殺したりする背景には、昔と違って「打たれ強さ」がなく、厳しくされることに不慣れであり、打たれ弱くなっているということがあるのではないだろうか。もちろん、それは

上述した社会の変化に伴うものであり、個人の責に帰すべきものではない。又、厳しさの不慣れなことは一概に悪いこととして否定されるべきものでもなく、現代、どのような教師が必要なのか、ということと合わせて議論されるべきである。学生たちの、「優しい教師」が良い教師である、とする回答に、自分も優しい教師が好きだった、自分も優しくされたい、というような気持ちがあらわれている。

結章 まとめに代えて

以上、見てきたように、学生の教職意識は時代とともに変化してきたといえる。厳しいだけではなく、基本的には優しい教師を求め、親身になって子どもの相談に乗るなど、距離の近い教師を理想の教師像としていた。また、さまざまな体験により広い視野を持つため、民間企業等での研修には非常に前向きな意識が見られた。これは、かつて人気だった「金八先生」のような熱血先生とも一味違った教師像である。この教師像の変化は、少子化、ネットの普及、あるいは雇用の問題など多様な社会情勢と連動しているといえるだろう。このような中、教職を目指す当事者と社会がかけ離れた教師像を抱き続ければ、両者の溝は深まるばかりだ。社会による過剰な期待によるストレスでかえって教師の指導力が低下することも考えられる。地域、親、学校の連携の重要性が言われて久しいが、教師のストレスを軽減し、教師と保護者との信頼関係を築くためには、社会の教師に対する既存の意識を問い直す必要があるのではないだろうか。

注

- 1) アンケートは、2015年7月15日、埼玉学園大学人間学部子ども発達学科において実施されたもの。
- 2) 久富善之・佐藤博『新採教師はなぜ追いつめられたのか－苦悩と挫折から希望と再生を求めて』高文研、2010年、同『新採教師の死が遺したもの－法廷で問われた教育現場の過酷』高文研、2012年などを参照。
- 3) 増田ユリヤ『教育立国フィンランド流教師の育て方』岩波書店、2008年参照。
- 4) 河村茂雄『教師力－教師として今を生きるヒント』誠信書房、62-64頁参照。